

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00173

研究課題名（和文）作品制作をする美術愛好家 18世紀フランスを中心とした美術家の戦略と趣味の変容

研究課題名（英文）Amateurs as Non-professional Artists: Strategies of Professional Artists and Changes in Taste in 18th-century France

研究代表者

船岡 美穂子 (FUNAOKA, Mihoko)

東京藝術大学・美術学部・講師

研究者番号：90597882

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：近世以来、大国となったフランスは文化においてもヨーロッパの先進的な中心地になった。優れた美術作品が生み出され、受容層の拡大に伴って、風俗画や静物画といったジャンル、絵画技法に対する関心も高まった。

本研究は、18世紀後半に美術界にも影響力を持った王侯貴族や富裕な市民を中心とした美術愛好家による余技としての作品制作に着目し、その諸相を調査して趣味の変化ならびに職業美術家の制作とのつながりを明らかにしたものである。美術愛好家たちは、自らも作品制作を嗜む経験や視点をしばしば生かして、作品を鑑賞・評価し、蒐集活動も行っていたことを分析した。その影響は、やがて周辺諸国にも波及したことも明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の西洋美術史においては、素人による作品制作の研究があまり進んでいなかったが、18世紀フランスの美術愛好家による作品制作の嗜みがどのようなもので、職業美術家の制作といかなる関係にあったか、いくつかの具体的事例に即して明らかにした点に、本研究の学術的意義がある。美術愛好家は、画家に敬意をはらって師弟関係を築くだけでなく、交友関係を通じて彼らに貢献すべく自らの知識を提供しようとした。「学識ある愛好家にして芸術家」であろうとした美術愛好家の営みは、やがて近代芸術学・美術史学にもつながると評価できる。現代の学問や作品制作を含めた生涯学習のあり方を考える上でも、社会的意義があると思われるものである。

研究成果の概要（英文）：From the late 17th century, France became a leading center for culture in Europe. As French artists produced outstanding artworks and expanded their customer base, amateurs' tastes grew more diversified in the 18th century. Their interest in genre paintings and still-life paintings, which were considered low in the traditional hierarchy of genres, as well as in painting techniques, increased.

This study focuses on the artistic practice of amateurs, mainly royalty, aristocrats, and wealthy elite citizens, who became influential in the art world in the late 18th century. The study found that amateurs often made use of their own experience in the study and practice of art, and perspectives gained thereby, to appreciate and collect artworks. It also became clear that their influence in the art world spread to neighboring countries.

研究分野：美術史

キーワード：愛好家 ディレクタント 18世紀 フランス アカデミー シャルダン レンブラント 版画

## 1. 研究開始当初の背景

近世以来、ヨーロッパの大国となったフランスは、文化においても先進的な中心地となった。優れた美術作品が生み出され、美術行政が進みアカデミーやサロンといった制度の発達に伴い、18世紀には享受層が拡大していった。受容者の理想モデルとして「趣味の審判者」たる美術愛好家が活躍するようになる。さらには、フランスの美術と制度、愛好のあり方もまた、周辺国の規範となり憧憬の的となって大きな影響を及ぼしていった。

やがて、美術作品の評価にも変化が見られるようになる。ジャンルのヒエラルキーにおいて下位とされた主題が好まれて需要が高まり、作品の内容ばかりでなく手仕事の側面（絵画技法）もまた再評価されるようになった。

この変化の要因として、本研究が新たに注目したのは、18世紀後半に美術界にも影響力を持った王侯貴族や富裕な市民を中心とした美術愛好家たちによる余技としての作品制作の流行である。自らも作品制作を嗜む視点から、作品を鑑賞・評価し、模写したいと欲したりする、新しい鑑賞者の態度が関与したのではないかと、という仮説を立てた。

研究史においては、19世紀以降を中心としてディレッタントイズムが特に進んだイギリスやドイツに比べると、18世紀フランスの美術愛好家（amateur）による作品制作を対象とする研究は、やや遅れており、散発的なものに留まっている。美術趣味や鑑賞のあり方の変化との関係、職業美術家の作品制作への影響、周辺諸国の美術愛好家・ディレッタントの事例との関係は、まだあまり明らかにされていない状況にある。

## 2. 研究の目的

本研究の主な目的は、次の4点にまとめられる。(1) 18世紀フランス、ならびにその影響下にあった西欧諸国の美術愛好家たちが余技として制作した作品はいかなるものであり、(2) 制作の実践を通して育まれた関心や知識がいかなるもので、(3) 美術趣味がどのように変化したのか、(4) 上記(1)・(2)・(3)に対して、職業美術家たちはいかなる戦略を持ち、作品制作においてどのような影響関係にあったのかを明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

まず、研究期間を通じて、必要に応じて関連文献の収集と読解を継続的に行った。

上記の目的(1)にあたって、主要な美術愛好家をリストアップし、ヨーロッパの美術館および図書館（フランス国立図書館をはじめとする版画素描室）に所蔵されている作品の実地調査を実施し、美術愛好家が制作した作品の特徴・傾向（主題、技法や様式、師となった美術家）を分析した。上記目的(2)・(3)のために、美術愛好家の著作や競売目録をはじめとする一次史料の収集も行い、コレクションにあらわれた趣味との関連を考察した。次に、(2)・(4)にあたって、同時期の美術理論やサロン批評の解釈と分析を行い、制作者の視点を想定した作品評価・趣味が醸成されていた可能性を探った。あわせて、職業美術家と美術愛好家のパトロネージ、ならびに作品制作上の師弟関係を探るとともに、職業美術家による作品の傾向を検討し、注文主の趣味の反映、また作品制作をする美術愛好家としての理想像の表現を考察した。

以上の調査の過程で、本研究目的にとって重要であることが新たに判明した対象が見いだされた場合には、それを重点的に研究することにした。つまり、当初予期していなかった結果が生じる可能性も念頭におきながら、柔軟に対応することを心がけた。

## 4. 研究成果

### ■研究の主な成果

(1) まず、国内外で従来あまり研究されてこなかった、美術愛好家（amateur d'art）の語義と王立絵画彫刻アカデミー（以下、王立アカデミー）内での自由会員としての位置づけ、ならびに素人としての絵画制作を調査した。まず美術愛好家（amateur d'art）の語義を調査・考察した。「職業とせずに作品制作を実践する者」との意味が1762年の『アカデミー・フランセーズ』に初出があり、さらにその先駆けとなる語義が1752年の美術事典に掲載されていることが明らかとなった。一方、ほぼ同時期の1747年には、王立アカデミーでの自由会員制度が改革され、さらに翌年には美術愛好家に作品制作の実践を奨励し、その果たすべき役割を説く講演会も開かれた。こうした美術界の動向と上記の事典における語義の展開が関連していた可能性が高いことが判明した。

次に、作品制作を実践した重要な美術愛好家として、ケリュス伯爵とラ・リヴ・ド・ジュリに着目して調査した。彼らが制作した版画作品を中心に実見調査して具体的に作品分析を行い、師となった画家たちとの関係も検証した。彼らは、画家たちから教えられるばかりでなく、しばしば直接加筆してもらいながら制作していた。このことは、美術家との緊密な交友や協同関係を示す効果があり、愛好家としての誉れとなったことが明らかとなった。さらに、自分が蒐集した絵画作品を複製版画として模刻した事例もあった。すなわち、蒐集活動と制作活動とが重なり合い連動する場合があったこと、またコレクションの知名度を高める効果もあったことが指摘でき

た。王立アカデミーの自由会員への選出には、複数の要因が関わったが、ラ・リヴについて言えば、同時代のフランス美術を庇護するとともに愛好家として作品制作を嗜んだこともまた、その入会に大きく資した可能性が高い。

18世紀フランスの能動的な美術愛好家たちの理念や実績は、やがて、ドイツ語圏の国々の「ディレッタント」へと継承されたと言える。以上の成果は、論文として公刊した（図書①）。

(2) 素描や絵画制作をする人物像をモチーフとして描いた、風俗画や肖像画の作品調査も実施した。ジャン＝シメオン・シャルダン作《デッサンの勉強》ならびに、その画中に描かれたジャン＝バティスト・ピガールによる彫刻作品《踵に小翼をつけるメルクリウス》を対象に個別研究を進めた。両作品は、まさに1753年のサロンに同時に展覧されており、それぞれの注文主・所蔵者である、スウェーデン王妃と、フリードリヒ大王とが兄妹であることが意識された展示であったことを指摘し、周辺国の王侯にも愛好されるフランス美術を誇る愛国的な趣味が反映されていたことを新知見として提示した。美術批評の分析もあわせて行い、当時の公式展覧会であるサロンが美術愛好家の趣味や名声にとっても重要な機能を担っていたことを具体的に明らかにした。また、王妃ロヴィーサ・ウルリカについては不明であったが、フランス美術の影響下にあったスウェーデンにおいても、少なくとも貴族や上流階級の人々の間でしばしば絵画制作が嗜まれていたことがわかった。（図書③、学会発表①）

(3) サロンでの美術批評や美術理論に、制作者の視点を想定した作品評価や趣味があらわれているかどうか検討した。この調査・考察の過程で、美術愛好家や批評家の間で、「魔術のような」と称される色彩法や明暗法、筆致といった絵画技法に対する関心が高まった背景には、同時期のレンブラント趣味の流行も関わった可能性が浮かび上がった。

そこで、研究開始当初は予期していなかったが、計画に修正を加えて、フランスにおけるレンブラント受容の視点から調査研究を行うことにした。このテーマをめぐる先行研究の文献資料の収集と読解、一次史料の調査を進めながら、同時期のレンブラント受容の諸相と、美術愛好家による作品や著作の分析を行った。その結果、美術愛好家はレンブラントの作品を蒐集するばかりでなく、しばしばその複製版画を制作していたことが判明した。専門教育を受けていない素人である美術愛好家たちにとって、レンブラントの作品は、素描よりも明暗法や自由な筆致に力点が置かれるがゆえに、技量の欠点を補いやすかった可能性が高い。このことは、模写の対象としても好まれた理由の一つとして指摘した。以上の調査研究の一部は、論文にまとめて発表した。（雑誌論文①）

(4) 上記(1)～(3)の研究成果を静物画・風景画の専門画家であったジャン＝シメオン・シャルダンの研究にも応用・展開し、そのモノグラフィーの中に組み込んだ。あわせて、美術愛好家の調査範囲もさらに広げ、フランスの貴族や上流市民で作品制作を嗜んだ事例を新たに加えるとともに、19世紀にも一部継承されていたことを指摘した。その中には、旧体制期の特権階級の身分にあった美術愛好家の子孫が、19世紀に職業画家となった事例もあった。また、フランス美術を愛好したバーデン＝ドゥルラハ辺境伯夫人や、マリア・クリスティーナ・フォン・エスタライヒといったドイツ語圏の海外の王侯たちもまた、フランス絵画やその版画を入手し、それを手本とした模写制作も行っていた。フランスの美術作品のみならず、美術理論書や事典をはじめとする書物の輸入や、フランスの美術家との交流も通じて、美術愛好家としての最新の嗜みも学び影響を受けていたと言える。以上の成果は、著作の一部として公刊した（図書④）

#### ■得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

イギリスやドイツ語圏の国々にかんする同テーマの研究は比較的進展しているが、18世紀フランスについて言えば、上記「1. 研究開始当初の背景」で述べたように、素人としての美術愛好家による作品制作をテーマとした研究は少なかった。

一方、本研究計画に着手する前に、国内においては、18世紀末から19世紀にかけての近代ドイツ語圏を対象とした「近代芸術におけるディレッタントの学際的研究」（日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究課題番号：15H03166)が既に進展しており、最終的な研究成果報告を兼ねた論文集に、書き下しの形で急遽加えていただけたことになった（図書①）。本研究にとって、同研究チームの重要なシンポジウムの聴講、研究者の方々との交流が大きな学びとなって重要な着想源の一つとなった。唯一、フランス美術史の立場から当該の論文集に寄稿する機会をいただいたことで、当初の計画以上に研究が進み、フランスの美術愛好家の活動がドイツ語圏のディレッタントたちにとって先進的な手本となったことも明らかにできた。この点で、学際的・国際的なディレッタント研究に、有意義な貢献も果たすことができたと考えている。

さらに上記研究成果(4)のとおり、シャルダン研究においても、本研究テーマによる新たな視点から個別の作家・作品研究にも光をあてることができた。海外に対しても、図書に欧文要旨をつけることによって、研究成果の一部を発信できたと考えられる。

#### ■今後の展望

本研究調査を進めてきた中で、美術愛好家たちが作品制作にあたってとりわけ好んだジャンルの一つが風景画であったことが明らかになった。そこで、素人による風景画の作品制作を中心

にすえた研究に新たに取り組む必要に迫られ、既に研究計画を立ててその一部を進めている状況にある。

本研究の成果を生かし、今後は、19 世紀以降に近代絵画の一大ジャンルを形成することになる風景画ジャンルの発展史に、フランスを中心とした素人の嗜みとしての風景画制作の営みを位置づけることを目指したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 船岡美穂子	4. 巻 18
2. 論文標題 18世紀フランスにおけるレンブラント趣味とシャルダン—美術愛好家の作品制作の実践を手がかりに—	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Aspects of problems in Western Art History (東京芸術大学西洋美術史研究室紀要)	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 船岡美穂子	4. 巻 17
2. 論文標題 原典史料翻訳 シャルル=ニコラ・コシャン(子)『シャルダンの生涯についての試論』(4)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Aspects of problems in Western Art History (東京芸術大学西洋美術史研究室紀要)	6. 最初と最後の頁 151-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 船岡美穂子	4. 巻 16
2. 論文標題 原典史料翻訳 シャルル=ニコラ・コシャン(子)『シャルダンの生涯についての試論』(3)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Aspects of problems in Western Art History (東京芸術大学西洋美術史研究室紀要)	6. 最初と最後の頁 93-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 船岡美穂子
2. 発表標題 シャルダンによる「素描する青年像」をめぐって
3. 学会等名 近世美術研究会
4. 発表年 2019年

## 〔図書〕 計4件

1. 著者名 佐藤直樹編、佐藤直樹、トルステン・ファルクヤナ・ピーパー、ウルリヒ・フィステラ、眞岩啓子、コルドウラ・ピショッフ、大角欣矢、星野宏美、尾関幸、仲間裕子、小松佳代子、船岡美穂子、山口遥子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 416 (83-105)
3. 書名 「18世紀フランスのディレクタントイズム 美術愛好家による作品制作をめぐる」『芸術愛好家たちの夢』所収	

1. 著者名 カレン・セレス、船岡美穂子訳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 朝日新聞社、NHK、NHKプロモーション	5. 総ページ数 266 (16-27)
3. 書名 「コートールド・コレクション」『コートールド美術館展：魅惑の印象派』所収	

1. 著者名 木村三郎、倉持充希、福田恭子、望月典子、栗田秀法、秋元優季、藪田淳子、川上恵理、宮下規久朗、千速敏男、小林亜起子、船岡美穂子、平正人、田中佳、安室可奈子、出羽尚、大杉千尋、坂本篤史、打林俊、小野崎康裕	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 22
3. 書名 『イメージ制作の場と環境 西洋近世・近代美術史における図像学と美術理論』所収	

1. 著者名 船岡 美穂子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 520
3. 書名 ジャン＝シメオン・シャルダンの芸術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------